

2018年1月7日 礼拝メッセージ

聖書：第一列王記5章1～6節

説教：宮を建てる

はじめに

あけましておめでとうございます。本年最初の主の日の礼拝に招かれています。

先週と新年礼拝ではイザヤ書を続けて開き、私たちはどこに向かって歩んでいるかを見て参りました。私たちは墓の穴に入って終わりという人生を歩んでいるのではなく、永遠のいのちをいただいて天の御国に迎えられていく。そこは死ぬほど退屈な場所ではなく、狼と小羊が仲良くしており、ライオンも熊も牛のように草を食べ、小さな子どもといっしょに遊んでいる。牧場でピクニックをしているようなイメージであることを見ました。そのような天の御国がいつ来るのか。イエスは「ただ父だけが知っておられます」と言われました。(マタイ24章36節) いつ来るかわからないものをじっと待っている。世の人たちの目には愚かに見えるでしょう。でも先人たちは待ち続けました。

今日からしばらく第一列王記を見て参ります。ここに登場するダビデの息子ソロモンは紀元前のおよそ九百七十年頃に活躍した人だと言われます。ざっと数えれば、いまか三千年前のはるか昔です。実は彼らも天の御国を待ち望んでいた。彼らは見えないものをまるで見えるかのようにして待ち望んでいた。それはどんなことだったのか、見て参ります。

1 ダビデとツロの王ヒラム(第二サムエル5章11節)

話は、ダビデがイスラエルの王となったと

きにさかのぼります。ダビデは大きく分けて三つの問題に直面していきます。一つ目は外側です。イスラエルの国境線はすきまだらけでした。すきまをかいくぐって敵が次々と襲ってきます。ダビデは軍隊を率いて闘わなければならない。

問題の二つ目、こんどは内側です。サウル家とのいざこざが長い間、ダビデを悩まします。ダビデもいろいろ手を尽くしてきた。それでもトラブルは絶えませんでした。

そして三つ目。こんどはダビデ自身のことになります。ダビデは聖書の中でも飛び抜けた信仰者のひとりと言ってよい。しかしいつもそうであったわけではない。ご存じのように、彼はあるとき部下であったウリヤの妻バテ・シェバと姦淫の罪を犯してしまう。彼はそのことを後で悔い改めはするのですが、この罪のことでダビデの家族が苦しんでいくことになる。結局、ダビデの次男アブシャロムは兄であるアムノンを殺し、父ダビデも殺そうとする。そのことでダビデはエルサレムから脱出して荒野に逃げなければならなくなったこともあった。なぜそうなったか。元をたどればダビデの罪が根底にあります。ダビデはどうすることもできなかった。そんなダビデでしたが、生涯の中で何人かの信頼できる友人に恵まれました。そのひとりが今日出て来るツロの王ヒラムです。この人は、ダビデがエルサレムに自分の家を建てようとしたときに、材料となる杉材を送ったばかりでなく、大工や石工も派遣してダビデを助けたことがあった。ダビデが亡くなり、ソロモ

ンが跡を継いだと聞いたときもヒラムはダビデとのかつての友情は忘れない。ソロモンの所にわざわざ特使を派遣し、お祝いのことばを伝えました。

2 ダビデとソロモン

1) 主の約束

ソロモンもそのお返しにとヒラムの所に特使を派遣し、お礼を述べさせます。ただお礼を言って終わりではなく、この機会を利用してあることをお願いしてみようと考えました。それはなにか。ここを読んでおわかりの通り、主の宮の建設に関してです。どうして宮を建てるのか。その動機については5節にある。主が、「あなたの王座に着かせるあなたの子、彼がわたしの名のために宮を建てる」と父ダビデに語ってくださったからだ。

これはいつの話かと言えば、第二サムエル記7章に出て来ます。先ほど述べたように、ダビデがヒラムの助けもあって無事に自分の宮殿を建て終えたときのことです。彼は幕屋に置かれたままになっている契約の箱のこと思い出します。自分だけが立派な家に住んでいいのだろうか。契約の箱を置く神殿を建てるべきではないかと思い、それで預言者ナタンをとおして主に伺ってみた。そうしたら主はこう語りました。「さらに主はあなたに告げる。『主はあなたのために一つの家を造る。』あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」(11節後半～13節)

「ああそうか。あなたの身から出る世継ぎ

の子とは、ソロモンに決まっている。それでソロモンは確信を持って宮を建てようとしたのだろう。」話はそんなに単純ではありません。もう少し複雑な事情があります。

2) 父ダビデの遺言は？

ダビデが宮の建設についてソロモンに何か語っていたのか。それが問題なのです。ダビデはできることなら自分の手で宮を建てたいと思っていました。でも主はダビデではなく、ダビデの跡を継ぐ者が建てるのだと語った。ならばということで、ダビデは高価な神殿の材料を集めてきた。それだけのことをダビデはやってきた。そこまでののですから、臨終に際して、当然ソロモンに遺言するはずですが、ところが不思議なことにダビデは宮の建設のことは一言も触れない。意外です。なぜダビデは触れなかったのか。

もう一度主がダビデに語られたことばに注目します。ナタンはこう告げていました。

「主はあなたのために一つの家を造る。」(第一サムエル7章11節) その後に、「あなたの身から出る世継ぎの子が家を建てる」と続いています。実際に宮を建てるのは世継ぎです。しかし、だれがそのプロジェクトを進めていくのか、それは主ご自身であると語っています。おそらくこれがポイントです。

ダビデはずっと宮の建設のことは気にかけていました。もうすぐ自分は死ぬというときに。本当ならソロモンに託した方だろうと思います。でもそれを決めるのは自分ではない。主なのです。もし主のみこころならばソロモンが宮を建てる。そうでなければ、ほかの別の人がすることになる。だから遺言では触れない。これがダビデの信仰でした。

こう言うと、こんな疑問が出るかも知れま

せん。「すべて主の御心だけになるというのなら、私たちは何もしなくてもよいのではないか。」ダビデはどうでしたか。ダビデは何もしなかったのか。いいえ、彼は自分のできることはした。せっせと高価な材料を外国から買い集めて倉庫に保管していた。それを使って宮を建てるのはだれであるのか、決めるのは主である。そのように区別して考えていました。

3) 御心を尋ね求める

さて、ソロモンはどうか。父からは、宮のことについていっさい具体的な指示を受けていません。それなのに、ソロモンは宮の建設についてヒラムに援助をお願いする。どうしてでしょう。

ソロモンが父ダビデの跡を継いでまだ間もなかった頃のことです。あるとき夢の中で主から「あなたに何を与えようか。願え」と質問されます。ソロモンは「善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください」と願い、このことが主の御心にかなったということがありました。主が自分を王の座に着かせてくださったと自覚したのはこの時でしょう。そして、ソロモンはかつて主がダビデに語ったことばを思い出します。「わたしが、あなたの代わりに、あなたの王座に着かせるあなたの子、彼がわたしの名のために宮を建てる。」ソロモンは聡明な人です。これが自分のことであるとすぐには考えない。これが自分のことなのかどうか、慎重に確かめていきます。

どうやって確かめたか。宮を建てようとしたとき、解決しなければならぬ大きな問題が二つあった。一つは、材料が足りない。父ダビデは材料を集めましたが、すべてそろっ

ていたわけではない。足りない分をどこから調達するか。二つ目の問題。材料がそろったとしても、技術を持った大工さんがいない。これが解決されなければ宮は建たない。これがもし主の御心ならばきっと道が開ける。

そこでソロモンは機会を待ちました。そんなときツロの王ヒラムから特使が派遣されてきました。ヒラムがかつてダビデを助けたことを知っています。ヒラムに頼んでみて断られれば、御心ではない。しかしもしヒラムがこれを受け入れてくれるなら、主の御心である。そう考えました。で、どうなったか。ヒラムは非常に喜んで協力を惜しまない。これは御心であると確信し、ソロモンは宮の建設に着手していきます。

3 ダビデの子イエス

1) ご自分のからだ

さて、その神殿は後にどうなっていったか。イエスは神殿を指して言われました。「このすべての物に目をみはっているのでしょうか。まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積み残されたまま残ることは決してありません。」(マタイ 24 章 1, 2 節)

ソロモンが建て、後の人たちが修復して立派になった神殿が跡形もなく崩される日が来るとイエスは言われました。跡形もなく壊されるのがわかっていながら、なぜ宮を建てるのか。主は一つの宮を建てて、王国を堅く立てるとさえ語った。いったいどういうことなのか。

2) わたしは三日でこれを建てる

旧約の時代、目に見える建物こそが主の宮であると大切に思われてきました。いまでもユダヤ教のひとたちはエルサレムに神殿を

再び造りたいと願っているそうです。しかし、イエスが来られたとき、主が建ててくださる宮とはなんであるのか、ぼんやりとしてたものがはっきりと見えてきました。主はこう言われました。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」(ヨハネ2章19節)

ご自分のからだこそが本当の神殿である、宮である。主は教えてくださいました。ダビデに語った主の約束とは、ダビデの世継ぎとして来られる方が死からよみがえってくださることだったと教えてくださいました。

天の御国は、この方のよみがえりをとおして信じる者たちに与えられていく。本当の宮をこの方が建ててくださる。ダビデはそれを信じていた。だからソロモンには遺言として託さない。

ソロモンも、やがて来られる世継ぎとは自分のことではなく、救い主のことであると指していると知っていました。自分はただ、目に見える神殿を建てる者に過ぎない。その方がやがて来られ、天の御国に招いてくださる日を待ち望んでいきました。

大先輩たちの信仰に倣い、私たちもともに待ち望みたいと願います。